

会員の広場



ムクドリが教えてくれるもの

坂本 正治（東京）

「プールサイド小景」で芥川賞を受賞、「第三の新人」と言われ、「夕べの雲」等の作品で独自の世界を展開した庄野潤三は今でも根強い人気がある。

小田急線の生田の山の上に夫婦二人で住み、朝には、庭に集まる小鳥たちに餌をやり、夜

はハーモニカを吹き、奥さんがそれに合わせ、童謡や唱歌を歌う。そして、時には山の下に住む息子や、足柄に居る娘が、孫を連れて遊びに来る。そんな東京郊外の穏やかで静かな生活風景を丁寧に描いている。

その庄野潤三ワールドにはメジロやヒヨドリ、ムクドリ等の小鳥たちがよく出てくる。どれも日本全国でおなじみの小鳥だ。

その中で、ムクドリは最近都会で特に目につくようになった。スズメより少し大きく、ヒヨドリより小さい。頭部に白い部分があり、クチバシと足が黄色い。昔は田や畑の虫を取るといふことで益鳥とされていた。しかし、最近では田舎の住む場所を追われ、大集団を作って都会の駅前の立木や街路樹に群れるた

め、騒音やフン害で害鳥とされることも多い。

先日、隣家にムクドリが巣を作った。そこは、以前は二世帯住宅だったが、今は老人が独りで住んでいる。2階は空き家状態で一年中閉め切っている。その2階の両戸の戸袋付近につがいのムクドリがいるのを最近よく見かけた。隣家の主人に伝えて覗くと、巣があった。驚いたことに戸袋全体が落葉や枯れ枝で一杯。あの小さな小鳥が2羽でよく集めたものだ。それらを掻き出したところ、最後に青緑色の小さな卵が2個出てきた。まだ孵化前だったのがせめてもの幸い。ムクドリにはお引き取り願った次第。

最近、高齢化で家族が減り、部屋の多くが空いている「隠れ空き家」が増えている。ま

た、我が家の近所で売り出されている住宅の売れ行きが悪い。大通りに面した2戸の新築建売住宅は売り出しから4か月経ってやっと1戸が売れた。もう1戸はまだ売れていない。更に、少し離れたところにある2戸の中古住宅は売り出して6か月。そのうち1戸は渋谷までドアツードアで20分の好立地だがまだ売れない。この間に売値は2割下がった。

ムクドリが戸袋に巣を作るような「隠れ空き家」が増え、同時に住宅が売れなくなってきた。また、バブル末期のワンルームマンション問題を彷彿とさせるシェアハウスの問題がニュース面を騒がせている。人口減少社会で住宅市場の風向きは確実に変わってきているようだ。